
夢の中の暗闇

庄垣彬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の中の暗闇

【Nコード】

N6936G

【作者名】

庄垣彬

【あらすじ】

女子高生の松井由美子が見る夢から始まる恐怖・・・

夢の中の暗闇

序章

蒸し暑い夜、松井由美子は自分の机で勉強していた。
受験勉強、由美子は高校3年の受験生。

良い大学に進むため一日何時間も机に向っている

「えっと、ここは・・・あっそうか、分かった」

今日はもう食事を挟んで6時間、受験勉強していた。

コン・コン

「由美子、もう一時よ」

扉の向こう側で母親の由紀子が心配して言った。

「はあゝい」

大きな声で返事をして

“もうお、うるさいなあほんとに”

そう小さな声で呟いた。

「今日はこの位にして寝ようか・・・はあ」

疲れていた、ここところ、勉強で遅くまで起きている事が多い、それに授業もちゃんと出ているから寝不足もある。

だから、ベッドに入るとすぐに意識が遠のき夢の中に入って行く。

気が付いた時にはもう朝、ほとんど寝た気がしないくらい、由美子はそんな毎日を過ごしていた。

最初の夢

今夜もベッドに入る。

「はあゝ疲れた」

いつもならすぐに寝る事が出来るはずが今夜は、なかなか眠る事が出来ない

何度も寝がえりをうちながら、時折暗い部屋の天井を見つめている。

「疲れ過ぎているのかなあ」

妙に目が冴えて眠る事が出来ない。

ふと、時計を見ると2時半を指している

「だめ、何も考えずに、考えずに」

そう呟いて目を閉じる。

数十分後、浅い眠りに入って行っているのを、由美子は意識をしていた。

由美子の目の前に暗闇が広がっている。

遠くの方に青白い光が見えているような気が・・・。

何故か胸の鼓動がだんだん早くなっている。

「何、あの光」

光がだんだん近づき大きくなってくる・・・（近づいているのは自分の方？）

“ここは何所、どうして、何？”

青白い光の中に何か影が見えたような気がした。

目を凝らして確かめようとしてみる、でも分からない。

光はだんだん大きくなり由美子の周りを光が包んだ。

“眩しい”

目を隠すように腕でひさしを作り、影の正体を確かめようと光の中を一步進んだ。

その時、影が由美子の腕をグイッと引っ張る。

「えっ・・・キヤー」

由美子の足元には何もなくて一直線に落下し、そして一瞬どす黒い何かが見えたと思ったたら。

ガバッ

「はぁはぁはぁ」

飛び起きる

「はぁはぁはぁ」

汗が体中を包んでいる

「夢?・・・夢かぁ」

ボタン

また、ベッドに横になる。

「怖かった、でもなんだったんだろう」

由美子は胸のあたり手を置くと鼓動が速くなっているのに驚いた。

家の外はうつすらと白み始めていた。

2回目

寝不足のまま学校に行く、登校の途中で友達数人と会った。

友達は昨夜のテレビの話、アイドルの話などで盛り上がっている。

由美子は寝不足で、半分夢遊病者のようになっていて話も殆ど聞いていない状態

「由美子、大丈夫？」

「うん、大丈夫」

「そう、顔色悪いよ、今日は帰ったら」

「大丈夫だって」

由美子は苛立ちを隠さずに言っ、さっさと一人で学校に向かった。

学校に着き、自分の机に座ると眠気が襲ってきた。

授業までの少しの時間、いつもなら参考書を開け勉強をする由美子だけ。

「少し、寝よう」

机に伏せるようにして目を閉じる。

暗闇が広がる、そして青白い光が遠くに、鼓動が速く打つ

「はっ！」

授業が始まるチャイムの音、それに起こされるように由美子は眼を

覚ます。

周りの喧噪が静かになり先生が授業を開始する。

由美子は急いで教科書を開いて授業に集中しようとした。

また、睡魔が由美子を襲う、瞼が重く何度も開けようとしてみるが、いつのまにか眠ってしまっていた。

「由美子、由美子」

小さな声で呼びかける声

「由美子。由美子、起きて」

「はっ・・・ごめん」

後ろの席の友達に起こされ、つい大きな声で言ってしまった。

「松井、何、謝ってるんだ、眠っていたからか」

先生が笑いながら由美子をちゃかすと教室中が笑いに包まれる。

由美子の顔は真っ赤になり、おかげで目が覚めた。

なんとか午前の授業を終え、お昼ごはんを食べるため教室中が騒がしくなる。

お互いの机をくっつけて、ワイワイ騒ぎながらお弁当を食べる者、さっさと食べて外に出て行く者、由美子も友達とお弁当を食べていた。

「由美子、ほんと大丈夫？勉強のし過ぎじゃない」

1人の友達が心配して言った。

「由美子、勉強好きだもんね」

もう一人の友達が茶化して言った。

「そんなんじゃない．．．ただ」

「ただ何？」

「うつん、なんでもない．．．ほんと、大丈夫、大丈夫」

友達2人はそれでも心配そうに由美子を見ていた。

お弁当と食べ終わった由美子は友達と離れ1人で校舎の屋上に来ていた。

落下防止のフェンスが屋上を囲んでいる。

他の生徒もいるが静かな雰囲気、それに風が心地よくて気持ちよかった。

ベンチに座って買ってきていたジュースの一口飲んで。

「あんな夢見るから．．．でもあの影はいつたいたんだろう」

そんな事を考えながらジュースを口元に運ぶ。

静かに時間が流れるのを感じながら由美子の瞼が閉じ始めた。

ジュースが地面に落ち、由美子も眠りに落ちる。

暗闇が広がる、遠くに青白い光。

“ まただ、また同じ夢 ”

由美子は明らかに自分が歩いて光に近づいているのが分かった。

そして、その光の中に影が

“ あの影は・・・人？ ”

心臓の鼓動が速くなってきている。

光の中の影は近づく程に人の形をはっきりさせている。

“ だれ？だれなの ”

怖くなってきたが進む足取りは止められない。

ますます鼓動が速く打ち始める。

青白い光が由美子の体を包み込む、そして人の影、それは白い服を着たおじいさん、由美子を見て微笑んでいる。

“ 誰なの ”

言おうとしたが声が出ない

“優しい、顔”

心臓が壊れそうな位、早くなり思わず手で胸を押える。

そう思いもう一步近付くと、おじいさんは手を差し伸べてきた。

由美子も手を出そうとした時

「危ない」

その声に由美子は眼を覚ます。

そして由美子の居た場所は、フェンスの外、校舎の端に立っていて、もう一步踏み出せば落ちていた。

「きゃ」

由美子はフェンスにすぐるようにもたれかかり

「はぁはぁはぁはぁ・・・どうして」

（もう少しだったのに）

小さい声だったが、はつきりと由美子には聞こえた。

体は汗でびっしょり、心臓の鼓動は早く打っている、それに体が動かない。

「大丈夫？」

フェンス越しに「危ない」と声をかけた生徒が近寄ってきた。

「先生を呼んできてもらっているから、そこから動かないで」

動かす事の出来ない体はそのまま、声も出さずにうなずいた。

先生が来てフェンスにある唯一の清掃用の出口から、由美子の入る所に行つて由美子を支えながらフェンスの中に入れた。

そして、保健室につれて行きベッドに寝かせる。

「大丈夫か、松井」

「はい、大丈夫です」

ベッドに寝かされ落ち着きを取り戻した由美子が答える。

「それにしても、どうしてあんな所に」

「分かりません、知らない間に・・・」

「そうか、でもおかしいな、あそこはカギがかけられていて出入りはできないはずなのに」

先生は不思議そうに首をかしげる。

「今日はもう授業に出なくていいから、ここでゆっくり休んで、それから帰ったらいい、お前のかばんはここに置いておくから」

「はい、すみません」

先生が保健室から出て行った。

「はあ、どうしたんだろ私、どうしてあんな所にいたんだろ」

白く塗られた天井を眺めながらつぶやく。

「それにしても、あのおじいさんは誰なんだろ、それにあの声」

「大丈夫う、」

保健の先生が来て由美子の顔を覗き込む

「顔色はよくなったみたいね、疲れがでたのかな？少し眠ったら、時間が来たら起こしてあげるから」

優しくそう言っで自分の席に戻っていった。

由美子は少し眠る事にし、ゆっくり目を閉じようとしたが、まるでフラッシュのように先ほどの出来事、暗闇、そして青白い光とおじいさんがよみがえってくる。

「すみません、私、もう帰ります」

そう言っでベッドから起き、保健の先生に一礼して保健室を出て行った。

学校を出て帰り道を歩いている。

体がだるい、頭がボーッとしている。

「もう少し寝ていたらよかったかなあ」

そう思っではみたけれど、夢を見るのが怖くなってきていた。

由美子は交差点に差し掛かり、左右を見る。

車の通りは多くないが歩行者の信号が赤のため待っている事にした。

隣にエプロンを着たおばさんが二人、おしゃべりをしながら立っている。

話声を気にしないように、由美子は信号を見ていた。

しばらくすると、聞こえているはずの、おばさんの話声、周りの喧騒のトーンがだんだん小さくなって、由美子の体が前後に少しずつ揺れ初めてきた。

“ あれ？ ”

由美子の目の前が暗くなり、また、一点の大きな光が広がり、人影が真ん中に現れる。

“ 何、なんなの ”

大きな光が由美子を包み、また、白いおじいさんが笑顔で立っ

る。

“だれ、だれなのよ”

白いおじいさんは由美子に向かって手招きをしている。

“いや、いやよ、行かない、いやあ”

そう思っている、体は前に進もうとしている

“だめえ、いやあ”

心の中で由美子が叫ぶと

プープププ

けたたましく車のクラクションが鳴る。

そして由美子の数十センチ前を車が通りすぎていった。

由美子はびっくりして、その場に座り込んだ。

「あなた、大丈夫、怪我はない」

横にいた二人のおばさんが心配そうに由美子によってきた。

「大丈夫です、大丈夫」

そう言って立ち上がり、青になった信号を見て横断歩道を走ってわたっていった。

ひきつった顔、無言、急ぎ足で家へと急いだ。

4 回目

家に帰ったが食事も、そして勉強もする気がおこらない。

心配した母の由紀子が声をかけるが返事をする気もおこらない。

ただ、怖かった、眠る事、あのおじいさんの事が。

その日の夜はベッドの上で眠らないように膝を抱えるようにして座る時折襲ってくる眠気を必至で我慢しながら。

朝を迎える、今日は学校は休み、お昼から塾に行く事になっている。

疲れと眠気、リビングに行くと母が

「由美子、どうしたの、顔色も悪いし」

「何でもない、大丈夫、おかあさん、濃いコーヒーを入れてくれる」

「えっ、分かったわ」

濃く苦いブラックコーヒーを少しずつ飲みながら目を覚ました。

自分の部屋に戻り机に座って参考書を開いて勉強を始めてみる。

「だめだ、全然頭に入らない」

なんとか塾の予習をしようとしてみたが、眠気と疲れで勉強どころではない。

仕方なく時間が来るまでテレビを見て気を紛らわす。

塾に行く時間が来て家を出る。

塾までは電車に乗って二駅、いつもなら参考書を片手に電車に乗っているのだけど、今日は車窓をただ眺めているだけ。

頭がぼーっとしていて、何も考えられな。

電車が塾のある駅に到着して塾に向かう。

塾の教室にはやる気満々の生徒が沢山座っていて、早速勉強している。

由美子も席に着いて参考書を開いて見てみる。

ボーッとした頭が文字を読み取るのを拒否しているかのように思えて、文字をまともに読む事さえできなくなっている。

授業が始まるが、塾の講師の話をただ聞いているだけだった。

講師の話が頭に入るところか、眠気を誘い始め、何度か意識がなくなりそうになる。

それでも、眠ることなく授業を受ける事ができた。

授業が終わり、すぐに塾を出て駅に向かい始めた。

疲れと眠気で、ふらふらになりながら歩いていた。

夕方の涼しい風、ホームには人がまばらで静か、由美子はベンチに座りボーツと向い側のホームを見つめていた。

向かい側のホームの階段を上がってくる人の影が一瞬見えた。

白い服・・・。

”あのおじいさん”

由美子の顔はこわばり、足も震えだした。

そして、おじいさんが由美子の方を見たとき、急に辺りが暗くなり、おじいさんの所だけ青白い光に包まれる。

由美子は逃げようとしたが体が自然におじいさんの所に向かって行く。

“だめ、だめ、行っちゃだめ”

心の中でそう叫んでいるけれど体が勝手に向かって行く。

“だめ、だめ、だめ”

次第に心臓が激しく鼓動を打つ

“いやあ、だめ”

叫んでいるが声が出ない。

鼓動がいつそう早くなり心臓が壊れそうになる。

“ いやあゝゝ、やめて ”

体がおじいさんに近づき、おじいさんが目の前に立っている。

“ いやあ、いやあ、だめ ”

「大丈夫、もう少しで楽になるから」

由美子の耳にそんな声が聞こえたその時

ドンッ

キィー

電車がけたたましくブレーキの音をたてる。

由美子の体は飛ばされ、数十メートル先で地面にたたきつけられ、まるで人形のように地面を数回転がって止まった。

「 ううう・・・ううう 」

“ 私、電車にひかれたの ”

声が出ない、体が動かない、意識の中で由美子は自分に起こった事を認識した。

「ううう・・・ううう」

「おゝゝい、誰か、人が電車にひかれた」

そんな声を遠のく意識の中で聞いている。

“ 助けて、助けて ”

痙攣してる体を動かそうとしながら、声にならない声で言っている。

そして、由美子の体を覆うように影ができた。

由美子は眼だけそちらに向けると、おじさんが頬笑みながら覗きこんでいた。

「もう、楽になれるよ、ゆっくり、ゆっくり、おやすみ」

由美子の意識は遠のき、その言葉が由美子の聞いた最後の言葉になり、心臓の鼓動がゆっくり止まった。

E n d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6936g/>

夢の中の暗闇

2010年10月31日14時04分発行